

書懷「節録」(西郷南洲)

一葦 纒かに 西すれば 大陸に 通ず

鴨緑 送る 処 崑崙 迎う

秋草 漸く 老いて 馬 晨に 嘶き

天際 雲 無く 地は 茫茫

嗚呼 予 二十七

将に 一生の 半を 終らんとす

肺肝 其れ 能く 何れの 処にか 傾けん

感じ 来つて 睥睨す 長風の 外

月は 東洋より 西洋を 照らす

一葦纒西大陸通 鴨緑送處崑崙迎

秋草漸老馬晨嘶 天際無雲地茫茫

嗚呼予二十七將終一生半 肺肝其能何處傾

感來睥睨長風外 月自東洋照西洋

解説 南洲二十七歳、大いにその活眼を開いた頃、人生の抱負を詠じた。

語釈 ※一葦||一枚の葦の葉。小舟にたとえる。※鴨緑||鴨緑江。※崑崙||チベット

トと中国の新彊省との境を東西に連なる大山系。※晨||朝旦、あさ。

※嘶||馬が鳴く。※茫茫||とりとめもなく明らかならぬさま。※肺肝||真心。

※睥睨||にらむ。のぞくの意。

通釈 目をあげて世界を望めば、世界も小なる感がある。小舟に乗って少しく西へ向かえば大陸に通じ、鴨緑江を一跨ぎすれば、崑崙が雲を圧して聳えている。広大な原野は、もう秋となつて草は枯れ、馬は暁天に向かって声高く嘶き、空は澄み、大地は果てしなく広い。これこそ、日本の男児の雄飛すべき世界である。自分ではや二十七歳、一生の半ばは過ぎた。それを僻陬の地、九州の一端の地にあつて、鬱勃たる意気をおさえかねている。この大経綸はどこでどのように行なうべきか。感懐は尽きず、風また吹き止まず、気がつけば何時しか手をとこまねき、風に立つて天の一角をにらんでいる。今しも秋の月は中天にのぼつて皓々と輝き、東洋から西洋へと照らしている。この月の明るいごとく、小国といえども日本の国威を列国に示すべきである。